

〔論説〕

戦争中にユダヤ人を助けた日本人

ベン・アミー・シロニー（倫理研究所客員教授）

明治時代に日本を助けたユダヤ人

第2次世界大戦中、日本はユダヤ人を助けましたが、それよりもはるか以前にユダヤ人が日本を助けた事がありました。明治時代には、日本に影響を与えたお雇い外国人の中にユダヤ人がいました。しかし、当時の日本人は彼らがユダヤ人であると気がつかなかったのです。彼らの一人がドイツ系の法律家、アバート・モッセでした。彼は1886年に伊藤博文によって東京へ招かれ、明治憲法の作成を手伝いました。モッセは妻と幼い娘、マルタと共に日本に4年間滞在しました。52年後の第二次世界大戦の際には、ナチス・ドイツが60歳であったモッセの娘マルタを捕え、死の収容所、アウシュビッツに送ろうとしました。このことがベルリンの日本大使館に知らされると、日本の外交官たちは彼女の父親の日本に対する功績を考え、彼女のためにドイツ政府に交渉しました。この交渉が奏功し、マルタはアウシュビッツへ送られることなく、代わりにテレゼンシュタットのゲットーに送られる事となりました。彼女はそこで「重要人物」としての地位を与えられ、生き長らえることが出来たのです。マルタの妹のドーラは、美術史家のエルヴィン・パノフスキーと結婚し、戦前に米国へ移民しました。その息子の物理学者のヴォルフガング・パノフスキーは、広島と長崎に投下された原爆の製造に携わった科学者の一人です。このように、ユダヤ人の一家族が、ユダヤの歴史と日本の歴史に跨って関係しているのです。

日本社会が初めてユダヤ人に注目したのは日露戦争（1904年－1905年）の時でした。当時、ニューヨーク最大手の銀行の一つであったクーン銀行の経営者は、ドイツ系ユダヤ人のヤコブ・シフでありました。彼はロシアでユダヤ人に対して行われた「大迫害」、ポグロムのため、帝政ロシアに対して憤慨していました。そこで彼は、戦争で日本を支持しようという決断に到ります。シフは、日本がロシアを打ち負かすために必要な巨額の資金を調達しました。日露戦争の後、彼は日本に招聘され、明治天皇から旭日章を授与されました。シフはその勲章を授与された最初の外国人です。今日でも尚、シフの功績に感謝する日本人に出会うことがあります。